

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳についての断章

山岡洋一

- 新世代の翻訳家に期待

新世代の翻訳家が活躍するようになれば、読者と編集者が翻訳に期待する質が一段上がる。そうなれば、短期間に翻訳全体の質がもう一段飛躍するだろう。

ひとさまの誤訳(第八回)

柴田耕太郎

- 『王女マメリア』(ロアルド・ダール作、田口俊樹訳、早川書房刊)

田口俊樹は、これから翻訳界を背負って立つ世代の人物。もう少し、気合を入れて翻訳にいそしんでもらいたいものだ。

翻訳と日本語

須藤朱美

- 会話にみる人称代名詞

電車のなかで聞いた小さな子供の会話から、奇異だし不愉快ですらある人称代名詞について考えた。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

新世代の翻訳家に期待

世の中は気づかない間に大きく変わっている。翻訳の世界も例外ではない。

そう実感したのは、ある編集者と話していたときだ。学者に翻訳を依頼すると、時間がかかりすぎるし、徹底して直さなければならなくなるので、手がかかりすぎる、だから学者にはもう翻訳は頼みたくないというのだ。いまさら驚くような話ではないと思えるかもしれないが、個人的には感慨深いものがあった。その編集者が所属する出版社には苦い思い出があったからだ。

十数年前、産業翻訳に限界を感じて、出版翻訳に重点を移していこうと考えた。経済、経営、政治などのノンフィクション分野なら勝負ができると考えたので、この分野でどのような翻訳家がどのような仕事をしているのかを調べた。この分野で活躍している翻訳家は事実上ひとりしかいない。その人の訳文を検討し、これなら負けるはずがないと思った。自信満々で営業に行った先が、その出版社だった。そして、すっかり落胆した。「うちは学者が専門家に依頼しています。翻訳専業の方にはお願いすることはありません」といわれたのだ。学者や専門家というのは名前だけで、じつは学生が院生の下手な下訳をそのままだしているだけではありませんかなどと反論して、気分を害される結果になった。この分野で活躍している翻訳家が事実上ひとりしかいないのは、需要がないからだったのだ。

あれから十数年たって、同じ出版社の編集者が、学者には翻訳は頼みたくないという。そういう話を聞いて考えてみると、いまでは経済、経営、政治などのノンフィクション分野だけでも、数十人の翻訳家（つまり、翻訳専業の人）が活躍している。一般読者向けの本は翻訳家が訳すのが常識になり、学者や専門家が訳すことはほとんどなくなった。それだけでなく、かなり専門的な本や、古典に近い本も翻訳家が訳すようになっている。翻訳の世界は様変わりしたといえるのではないだろうか。

餅は餅屋なのか

いまの感覚で考えれば、餅は餅屋、翻訳は翻訳屋ではないかと思えるかもしれないが、少なくとも十数年前まで、そうは考えられていなかった。餅は餅屋だからこそ、翻訳は学者や専門家に依頼するものだったのだ。少し考えてみれば、その理由はすぐに分かる。

150年少し前に黒船が来航したとき、日本は欧米がはるかに優れた知識と文化をもっていることを思い知

らされた。そこで明治政府は学校制度を作り、その頂点にたつ帝国大学などの教育研究機関に、欧米の優れた知識と文化を吸収し、国内に広める任務を与えた。欧米の優れた知識を吸収し広めるために使われた方法はいくつかあるが、主要な方法のひとつが翻訳である。だから当時、翻訳は、学者や専門家にとって副次的な仕事などではなく、主要な仕事のひとつであった。翻訳とは、時代を代表する学者が取り組むべき仕事だった。大学とは翻訳者養成機関だったといってもそれほど誇張にはならない。

個人が欧米の優れた知識を学ぶことだけが目的であれば、外国語を学び、外国語で教育を受け、外国語で考えるようにすればいい。翻訳という厄介な方法をとる必要はない。だが、その結果、外国語で教育を受けたエリートと一般大衆の間に大きな溝ができる。エリートは海外に流出し、成功する人もでてくるだろうが、国内は貧困から抜け出せない。これが当時の後進国のたどった道だ（いまでもそういう国は多い）。日本は19世紀後半、欧米以外の国としてはまず例がないほど徹底して翻訳を行った。この点と、日本が欧米以外の国ではじめて近代化に成功したこととの間に関連がなかったとは思えない。翻訳とは、言語共同体としての民族が他の民族から知識や文化、技術、考え

進化大全

ダーウィン思想: 史上最大の科学革命 Evolution
The Triumph of an Idea
カール・ジンマー [著] 渡辺政隆 [訳]

B5判変型
オールカラー500ページ
写真・図版類150点

進化理論の
歴史から
最先端までを
網羅した一冊。



●定価 6,000円(税込み) ISBN 4-334-96173-8

光文社 〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
<http://www.kobunsha.com>

方、情報などを学び取り入れるための方法である。欧米の優れた知識を国民の間に広めようとするとき、柱のひとつになる方法である。その仕事を担ったのが、学者や専門家であった。だから、翻訳は学者や専門家に依頼すべきものだったのである。

ハードルを上げる

ではなぜ、十数年前には学者や専門家に依頼するのが当然だったノンフィクション翻訳が、いまでは専門家の翻訳家に依頼するのが当然だと思われるようになったのだろうか。わずかな期間に、考え方がこれほど大きく変わったのはなぜなのだろうか。

十数年前、自信満々で出版社に営業に行ったのは、何よりも、ノンフィクション出版翻訳に不満を感じていたからである。世間知らずの産業翻訳者がそう感じたからといって、たとえば出版社の編集者がそう感じていたとはかぎらない。読者の大部分もそうは感じていなかったはずだ。それでも、不満を感じている人間がひとりいれば、そして不満が根拠のあるものであれば、同じように感じる可能性のある人が数万人や数十万人いても不思議ではない。また、自分ならもっと質の高い翻訳ができると考える人が何十人か何百人いても不思議ではない。そのなかから偶然、出版翻訳の機会を得る人がでてきて、問題点を解決する翻訳ができれば、潜在的なものにすぎなかった不満が一気に表面化することがある。

ではどういう不満が表面化したのか。大きく分けて翻訳のスピードに関する不満と翻訳の質に関する不満があったことが前述の編集者の話から分かる。

ノンフィクション翻訳について編集者が見方を変えた最大の理由は、おそらく翻訳に要する時間である。学者に依頼すると時間がかかりすぎるのだ。産業翻訳者はいつも時間勝負の仕事をしているから、一刻も速く翻訳を仕上げるという習慣が身についている。学者や専門家はたいてい、そういう感覚をもたないから、翻訳に時間がかかる。それに専門家の翻訳者なら、必要に迫られれば、月に300時間以上を翻訳にかけることもできる。学者や専門家がかけられる時間はせいぜい月に数十時間だろう。このため、専門家の翻訳者と学者では1冊の本の翻訳にかかる時間がまるで違う。経済、経営、政治などのノンフィクション分野にはタイミングが重要で、翻訳のスピードが決定的な意味をもつものがある。専門家の翻訳者はおそらく、翻訳に期間がかかりすぎるという問題を解決する点で、編集者にとって便利だったのだろう。

ノンフィクション分野で何人かの専門家の翻訳者が活躍するようになって、翻訳のスピードという点でハードルが上がった。学者や専門家はひとつにはこのハー

ドルを越えることができなかつたために、脱落していったのだろう。

もうひとつの要因は翻訳の質である。この点でも、おそらくはハードルが上がり、ほとんどの学者や専門家が越えられなくなった。だからこそ、学者に翻訳を依頼すると、徹底して直さなければならなくなり、手がかかりすぎるという話になる。

学者が訳し、編集者が徹底して直すほどの余裕がなかったとき、どういう翻訳書ができかねないかは、いまではたいていの読者が知っている。だから、編集者がこのようにこぼしている話を聞いても、誰も不思議に思わない。だが、よく考えてみると、これは何とも不思議な話のはずだ。学者というからには、その本の内容を編集者とは比較にならないほどよく理解しているはずだ。学者は教育者でもあるから、その本の内容を読者に伝えるためにどのような言葉を使い、どのように書けばいいのかを理解しているはずだ。学者の訳文にいてみれば素人同然の編集者が手を入れたりすれば、間違いだらけのとんでもない翻訳書ができるのではないだろうか。

現実には、編集者が手をくわえたために、正しく訳されていたものが間違いになる場合があることは容易に想像がつく。だが、ほとんどの場合、編集者が徹底して直してくれれば、はるかに「読みやすい」文章になることを、たいていの読者が知っている。なぜなのか。たいていの場合、学者が使う翻訳のスタイルが読者の要求にあわなくなっているからだ。いわゆる翻訳調、英文和訳調の翻訳のスタイルをいまだに使いつづけているので、「読みにくい」訳文になる。編集者はそういうスタイルの翻訳では読者が受け入れないことをよく知っているので、徹底して直さなければならぬと感じているのである。

わずか十数年で読者の要求が変わり、編集者の姿勢が変わった。大部分の学者は少なくとも翻訳のスタイルという点で変わっていないから、十数年前に「翻訳は学者が専門家に依頼します」といっていた出版社が、いまでは「学者には翻訳を頼みたくない」というまできになっているのである。こうなった背景にはいくつかの要因がある。

第1に、社会が変化した。欧米の優れた知識を吸収し伝える努力が奏功し、科学や技術、経済や社会、文化の面で欧米との距離が縮小するとともに、学者や専門家の仕事のうち、翻訳の地位が下がってくるのは避けられないことであった。現に「翻訳学問」という言葉で、学者や専門家の努力不足が非難されるようになっていた。翻訳ばかりやっていないで、自前の研究を進めてほしいというわけだ。学者や専門家の間で、翻訳に本気になって取り組む姿勢が薄れたとしても不

思議ではない。そうなれば、本気で翻訳に取り組む専門翻訳者にいつか、翻訳の質の点で追い抜かれる。

第2に、専門の翻訳者の数が増えた。社会が豊かになり、国際化が進むとともに、翻訳の需要が増え、学者や専門家だけではまかないきれなくなった。たとえば小説のうち純文学と呼ばれる分野の翻訳は英文学者、仏文学者などと呼ばれる人たちが担ってきたが、一般読者向けのミステリー、SFなどは学者が敬遠したためだろうが、翻訳家が担うのが常識になってきた。産業翻訳の分野でも、専門翻訳者の層が厚くなった。

第3に、専門翻訳家が訳した質の高い翻訳書が増えた。この点がとくに目立つのは、一般読者向けの娯楽であるミステリーやSFなどの分野であった。いまでは理解しにくいかもしれないが、以前には大衆向けの娯楽として書かれた小説であっても、欧米の進んだ文化や社会を学ぶための教材として扱われていた。たとえば居住まいを正し、原書と辞書を横に置き、翻訳でシャーロック・ホームズを読む。そういう読者を想定すれば、翻訳は英文和訳調でなければならないとされてきた理由が理解できるはずだ。だが、ソファーに寝ころがってキングのホラーを読む読者を想定したとき、英文和訳調ではまずいという理由も理解できるはずだ。このため、質の高い翻訳はまず、エンターテインメントの分野で目立つようになった。

エンターテインメントの小説の分野で質の高い翻訳が目立つようになると、他の分野、たとえば経済や経営、政治などのノンフィクション翻訳の分野でも、翻訳の質に不満を感じる人がでてくる。小説でできることがなぜ、ノンフィクションの分野でできないのかという不満である。不満というのは代案があるからこそ感じるものだ。翻訳がすべて英文和訳調で行われているのであれば、そのことに不満を感じる人は少ないはずだ。だが、専門の翻訳家による代案をみせられれば、英文和訳調の翻訳に不満を感じる人が増える。

ノンフィクション翻訳の主な目的は娯楽ではない。優れた知識や考え方、情報の吸収である。だが、娯楽を主な目的とする分野でできることが、知識や考え方、情報の吸収を目的とするノンフィクションの分野でできないはずがない。ノンフィクション翻訳の分野で翻訳の質に不満を感じる人が少なからずいたとしても不思議ではない。その後、英文和訳調の牙城であった哲学の分野ですら、長谷川宏のヘーゲル訳があらわれ、代案があることが明確になった。

外国の優れた知識や文化を伝える仕事を誰が担うのか

要するに、出版翻訳の世界では気づかない間にハードルが上がり、それを越えられない学者や専門家はかなりの分野で、翻訳から撤退したのだ。少なくとも翻

訳という形で、外国の優れた知識や文化を日本に紹介する仕事から降りてしまった。もっと時代に即した有意義な仕事をしていると思いたい。だが、翻訳を通じて外国から優れた知識や文化を吸収すること自体が不要になったわけではない。簡単な事実をみてみれば、その点はすぐに納得できる。

世界の人口は約60億人、そのうち日本語を母語にする人は約1億2600万人だから、世界全体の知識や文化のうち、日本語で考えられ、話され、書かれている部分の比率は単純に考えれば2%ほどにすぎないはずである。残りの98%は何らかの外国語で考えられ、話され、書かれている。日本がとくに遅れている状況ではなくなったとしても、世界全体の優れた知識や文化のうち圧倒的な部分が外国語によるものだという事実には変わりはない。翻訳が重要であることに変わりはない。

では、大切な翻訳を誰が担うのか。学者や専門家が事実上この仕事から降りたいま、専門の翻訳者しかいないのはたしかな事実だろう。

ハードルをもう一段上げよう

過去十数年にノンフィクション出版翻訳の世界で起こった動きをみてみると、世の中がときにはあっけないほど簡単に変わる場合があることが分かる。学者と専門家の領域だったノンフィクション出版翻訳に、専門の翻訳者が何人があらわれた。その結果、翻訳の質とスピードの面でハードルが上がり、ハードルを越えられない人たちがふるい落とされて、短期間のうちに専門の翻訳者が圧倒的な位置を占めるまでになった。

いまでは十数年前と比較すれば、出版翻訳の質は向上したと思う。それでも、現状には不満を感じる。「読みやすい」という名の幼稚な翻訳が少なくないし、英文和訳調から十分に脱却できていない翻訳が多い。外国の優れた知識を母語で学べるようにし、外国の優れた娯楽を母語で楽しめるようにするのが翻訳である。翻訳の本来の役割を考えれば、「読みやすい」翻訳から一歩飛躍して優れた日本語で訳すことが大切だ。

新しい世代の翻訳家が登場し、翻訳のハードルをもう一段上げるように期待したい。ほんとうに優れた翻訳家が何人が活躍するようになれば、読者と編集者が翻訳に期待する質が一段上がる。そうなれば、短期間に翻訳全体の質がもう一段飛躍するだろう。

『王女マメーリア』(ロアルド・ダール作、田口俊樹訳、早川書房刊)

この作品集の一編『アンブレラ・マン』(原題 THE UMBRELLA MAN)は、ペーパーバックで 6 ページの短編。訳文を読んで気になった箇所にも印をつけ、あとから点検してみた。

(疑)は、個人の好みによるところもあるが、気になる表現の箇所(...で示す)。

(悪)は、読みにくい、誤読しそう、コロケーションが悪い、などの箇所(アイウ...で示す)。

(誤)は、文法上、語法上の瑕疵(...で示す)。

(評)は、わたしのコメント。

[A]が田口訳。[B]は参考として示す、一翻訳志望者の訳文。

* 下線は問題箇所([B]については、その箇所を指摘するにとどめた)

(p33)

[A] きの中の夕方、わたしとわたしのママに起こったおかしなことを話そうと思います。わたしは十二歳の女の子。ママは三十四歳。でも、わたし、背はママともうほとんど 変わらないんだから。

[B] わたしとお母さんがきのうの晩に体験したおもしろい話をしたいと思います。わたしは十二歳で、お母さんは三十四歳。でも、背の高さはもうほとんど一緒です。

I'M GOING TO TELL YOU about a funny thing that happened to my mother and me yesterday evening. I am twelve years old and I'm a girl. My mother is thirty-four but I am nearly as tall as her already.

(評)

(疑) 「わたしのママ」では他の子のママと比べるのかな、と余計なことを読者に予測させてしまう。「起こったおかしなこと」は舌足らず。happen の、「身に降りかかる」という意味を出してほしい。

(疑) 「...なんだから」の強調が生きていない。「それで、どうなの」と問いかけたくなる。また、女の子のこの甘えた言葉遣いが、あとになるにつれて、大人の口調に変わっており、統一感がない。

[A] きの中の午後、わたしはママに連れられて、歯医者さんに 診てもらうためにロンドンまで行きました。歯医者さんは虫歯を見つけてくれて、それは奥歯だったんだけど、あまり痛くしないで詰めてくれました。

[B] 昨日の午後、わたしはお母さんに連れられてロン

ドンの歯医者に行きました。歯医者さんは奥歯の虫歯の穴をあまり痛くしないようにうめてくれました。

Yesterday afternoon, my mother took me up to London to see the dentist. He found one hole. It was in a back tooth and he filled it without hurting me too much.

(評)

(疑) 「診てもらうために」：子どものことばにしては、まどろっこしい。「診てもらいに」

(疑) 挿入がわざとらしいし、「見つけてくれて」がまどろっこしい。「...見つけて、」

(p34)

[A] 「カフェに戻って雨がやむのを待たない？」とわたしは言いました。実はバナナ・スプリットをもうひとつ食べたかったんです。それはすごくデラックスだったんです。

[B] 「カフェに戻って雨がやむのを待とうよ。」もう一つバナナスプリットを食べたかったのでそう言ってみました。とてもおいしかったのです。

'Why don't we go back into the café and wait for it to stop?' I said.

I wanted another of those banana splits. They were gorgeous.

(評)

(疑) 「実は」「それは」がうるさい。なくてもよいのではないか。「デラックス」は、表現が古い。

[A]...。見事な白い髭とふさふさした白い眉毛、皺だらけの頬はピンク色をしていました。そして傘を高々とさしてしていました。

[B]...。立派な白いヒゲにふさふさの白い眉毛、しわしわのほっぺはバラ色でした。傘を高々とさし、雨から身を守っていました。

He had a fine white moustache and bushy white eyebrows and a wrinkly pink face. He was sheltering under an umbrella which he held high over his head.

(評)

(疑) 「ピンク色」が何を象徴するのかわからず。「血色がいい」のか、「酒を飲んでいる」のか、「ほんとにピンクのほほ」なのか。例：Her cheeks are pink with health.(彼の顔は健康なピンク色だ) Go pink with the anger.(怒って赤くなる)。ここ、解釈を出すべきだろう。

[A] 「はあ？」と、ママは(ア)よそよそしい素振りで冷ややかに言いました。

[B] 「はい？」お母さんはとても冷たく、つきはなすように言いました。

‘Yes?’ my mother said, very cool and distant.

(評)

(悪)(ア) 英語は同じ意味の言葉を重ねてリズムを出すのが好き。cool と distant は、同義語反復「よそよそしい」。例：a dangerous and destructive creature / History proves that dictatorship do not grow out of strong and successful governments, but out of weak and helpless ones.

「よそよそしい素振り」というと、「知り合いなのに、そうでないフリをする」という意味になってしまう。

「いかにもよそよそし気に」ぐらいでどうか。

[A] ママは男の人を疑り深そうな眼で見つめました。疑り深い人なんです、ママというのは。特にふたつのこと---見知らぬ男の人とゆで卵に関しては。()ゆで卵の殻を割ってから、ママは卵の殻の内側をスプーンでこねくりまわすんです。まるで鼠やなんかが中にいやしないかと思ってるみたいに。

[B] おじいさんのことを怪しんでいるようでした。何でも疑ってかかる、うちのお母さんはそういうひとなんです。怪しげな男のひととゆで卵についてはとくにそうなんです。ゆで卵の殻を割ると、まるでネズミか何かがいるかのように中をスプーンでさらうんです。

I saw my mother looking at him suspiciously. She is a suspicious person, my mother. She is especially suspicious of two things---strange men and boiled eggs. When she cuts the top off a boiled egg, she pokes around inside it with her spoon as though expecting to find a mouse or something.

(評)

(誤) ()cut 部分 off 全体、で「全体から部分を切り離す」。「ゆで卵の上のところを切ってから、ネズミか何かがいるみたいに、内側をスプーンでかき回すんです」

(p35)

[A] ママはあごを上げ、鼻の長さをいっばいにとって老人を見下ろしました。それは(イ)怖ろしい代物なんです、ママの冷ややかな鼻越しのひとにらみというのは、たいていの人はこれで完全に参っちゃうんです。わたしの行っている学校の女の校長先生も、このママのすさまじい一撃で、(ウ)しどろもどろになり、ばかみたいにへらへら笑わせられたのを、まえにみたことがあるんです。

[B] お母さんはあごをつきだし、おじいさんのことを見下ろしました。冷ややかに見下ろすお母さんの目は

とっても怖いのです。その目を向けられるとたいていの人

はしどろもどろになってしまいます。お母さんにキッと見下ろされた校長先生がばかみたいに笑みを浮かべ口ごもるのを見たことがあります。

My mother's chin was up and she was staring down at him along the full length of her nose. It was a fearsome thing, this frosty-nosed stare of my mother's. Most people go to pieces completely when she gives it to them. I once saw my own headmistress begin to stammer and simper like an idiot when my mother gave her a really foul frosty-noser.

(評)

(疑) 他の箇所の訳が流れていれば、工夫した表現と思えるかもしれない。だが、全体がこの程度の訳文レベルでは、ここ苦勞して考えたんだね、でも浮いてるね、と言いたくなってしまふ。

(悪)(イ)言葉の誤用。代物を、抽象的なものに用いるのは無理。

(疑) 同じ感想。

(悪)(ウ)これも同義語反復。また、A and B + M(修飾要素)の場合、一般的に M は A と B の両方に掛かると見るのがふつう。この訳者の場合、反復される同義語をことさら違う意味に訳し分けようと無意味な努力をしているように感じられる。

(p36)

[A] 小さな老人は、傘を一方の手からもう一方へ持ちかえて言いました。「あんなものを忘れるなんて、今までに一度もなかったことなんです」

「何を忘れるですって？」ママは問いつめるように言いました。

[B] おじいさんは一方の手からもう一方へ傘を動かし

英語を学びなおしたい人にとって絶好の再入門書

翻訳力錬成テキストブック

柴田メソッドによる英語読解

柴田耕太郎著

定価 10,290 円 (本体 9,800 円) A5 版・680p

課題の例文は定評ある 100 編の名文を選定
実践的な翻訳技術養成講座

日外アソシエーツ

〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

ました。「一度も忘れたことがないのですよ。」
「何を忘れたことがないですって？」お母さんはびしゃりと言いました。

The little man shifted his umbrella from one hand to the other. 'I've never forgotten it before,' he said.

'You've never forgotten what?' my mother asked sternly.

(評)

(疑) 「あんなもの」が立ちすぎる。除いたほうがよい。

(p37)

[A] ママは下唇を噛みながら考えている様子でした。でも、少しくらついてきているのがわたしにもわかりました。傘を手に入れるという考えに強く誘惑されたのにちがひありません。

[B] お母さんは下唇をかんで考えを巡らせていました。少しだけ信じる気になったようで、傘をさして帰るといふ考えにだいたいづらついているようでした。

My mother stood there chewing her lower lip. She was beginning to melt a bit, I could see that. And the idea of getting an umbrella to shelter under must have tempted her a good deal.

(評)

(疑) melt a bit は、「少し気持ちが和らぐ」。「ぐらつく」では「動揺する」ととられてしまう。

(疑) 直訳的。語り手は子どもなのだ。最初の「...ほとんどかわらないんだから」の、子どもを強調した語り口と不釣合い。

(p38)

[A]...。それでわたしは、わたし自身の冷やかな鼻越しのひとにらみを、ママに対して向けました。

それでママにも、わたしの言いたいことがわかったようでした。聞いて、ママ、とわたしは眼で訴えたのです。こんな風に疲れた老人の 弱身につけこむのはよくないことよ。やってはいけないことよ。

[B]...。だからわたしはあごをつんと上げてとっても冷ややかにお母さんを見ました。ねえ、お母さん、こんな風に困っているおじいさんの弱みにつけもむのはよくないよ。そんなことやっちゃだめ。お母さんもわたしの言いたいことがわかったようでした。

I was giving her one of my own frost-nosed looks this time and she knew exactly what I was telling her. Now listen, mummy, I was telling her, you simply *mustn't* take advantage of a tired old man in this way. It's a rotten thing to do.

(評)

(疑) 「それで」が続いてうるさい。

(疑) これも 同じ。

(疑) 誤字。「弱味」

[A] ママは(工)横顔でわたしに勝ち誇ったような顔をしてみせました。

[B] お母さんは勝ち誇ったようにちらりと見てきました。

My mother gave me a triumphant sideways look.

(評)

(悪)(工)どんな顔か想像できないのだが...

(p39)

[A] 「彼が詐欺師でないことを確かめたかったのよ。でも、これでわかったわ。あの人は紳士よ。あの人の手助けができてほんとにママは喜んでるわ」

「そうでしょうね」

[B] 「うそつきじゃないか確かめるためよ。確かめたとおり、あの人は紳士だったでしょう。人助けができてよかったわ。」

「そうね、お母さん。」

'I wanted to satisfy myself he wasn't a trickster, she said. 'And I did. He was a gentleman. I'm very pleased I was able to help him.'

'Yes, mummy,' I said.

(評)

(疑) あいづちが、弱いのでは。

[A] 「あそこよ。通りを渡ってる。まあ、ママ、見て。

Japan Knowledge

信頼の知識リソース

ジャパンレッジ.com

「重たい事典や辞書の引き比べ、肩がこって仕方ない…」
「百科事典も国語辞書も英和辞典も人名事典も、必要だけど置き場所がない！」



「インターネットの情報検索って、ごみが多くて選り分けるのが大変」
そんなあなたに…

日本最大の知識探索サイト
ジャパンレッジ.com
をお勧めします。

ご入会・お問い合わせは下記 URL へどうぞ。
<http://www.japanknowledge.com/>

JapanKnowledge.com

(C)株式会社ネットアドバンス <http://www.netadvance.co.jp>

あの人、走ってるわ」

わたしとママは()人混みのなかに見え隠れする老人を眼で追いました。通りの向こう側に行き着くと彼は左に曲がり、かなりの速足で歩きだしました。

[B]「あそこ。通りを渡ってる。みてよ、お母さん。あのおじいさんすごく足がはやい。」

おじいさんがうまく身をかわして人ごみをぬける様子を二人でみていました。通りの向かい側につくと左に曲がって足早に歩いていきました。

‘Over there. He’s crossing the street. Goodness, mummy, what a hurry he’s in.’

We watched the little man as he dodged nimble in and out of the traffic. When he reached the other side of the street, he turned left, walking very fast.

(評)

(誤)()the traffic は、「往来」だから、「人」と「車両」の二つが連想されるが、前に「通りを渡ってる」とあるのだから、ここは車両交通のこと。

[A] ママは体をじっと固くして、通りの向こうの老人を見つめていました。彼の姿はとてはっきり見えました。彼は歩道を突進していました。ほかの歩行者を サイドステップしてよけ、行進中の兵隊さんのように大きく手を振って。

「何かをやるようとしているのよ」ママは固い表情で言いました。

「何かって？」

(オ)「知るもんですか」とママはぴしゃりと言いました。「でも、確かめてやるわ。おいで」ママはわたしの腕をつかんで通りを渡りました。そしてわたしたちも左へ曲がりました。

[B] お母さんは通りの向こうのおじいさんに目を向けたまま黙って立っていました。おじいさんの姿ははっきりと見えていました。その足どりはとても速く、歩道を掛けるように進んでいきます。他の歩行者を踏るようによけ、兵隊が行進するように腕を大きくふって歩いて行きました。

「何かあるはずだわ」無表情な顔のお母さんが言いました。

「だけど何が？」

「分からないわよ。だけど、それがなんなのかつき止めにいくの。ついていらっしやい。」と怒鳴るように言って、お母さんはわたしの手をつかみ、通りを渡って左に曲がりました。

My mother was standing very still and stiff, staring across the street at the little man. We could see him clearly. He was in a terrific hurry. He was bustling along the pavement, sidestepping the other pedestrians and swinging his arms

like a soldier on the march.

‘He’s up to something,’ my mother said, stony-faced.

‘But what?’

‘I don’t know,’ my mother snapped. ‘But I’m going to find out. Come with me.’

She took my arm and we crossed the street together. Then we turned left.

(評)

(疑) 女の子が、老人を「彼」っていいですか。「歩道を突進」は、表現が生硬。

(疑) 日本語でいえることは、日本語にしたほうがよい。

(疑) be up to ~ 「～をたくらんで」

(悪)(オ) snap は「ぶつきらぼうに」。「ぴしゃり」とはだいぶ印象がちがう。相手に止めを刺すのではなく、話題を変えたいのだ。

(疑) find out 「見破る」といった強い言葉がほしい。

(p41)

[A] 「あのドアのなかにはいったのよ！」とママは言いました。「ママ、ちゃんと見たわよ！あの建物のなか！まあ、なんてこと、あそこはパブじゃないの！」

[B] 「あのドアの向こうよ。ちゃんと見たわ。あの店のなか。まあ、なんてこと、飲み屋じゃないの。」

‘He went in that door!’ my mother said. ‘I saw him! Into that house! Great heavens, it’s a pub!’

(評)

(疑) ママ、わよ、！。くだい。

長谷川宏 いまこそ読みたい 哲学の名著

自分を変える思索のたのしみ

アウグスティヌス シェイクスピア プラトン
アラン ルソー 孔子 マックス・ヴェーバー
パスカル J・S・ミル フォイエルバッハ
ボードレーン デカルト ドストエフスキー
ウイトゲンシュタイン メルロ・ポンティ

晴耕雨読にふさわしい古典たちから
「哲学」のおもしろさが見えてくる。

●1,785円(税込み) 4-334-97459-7

光文社 〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6
<http://www.kobunsha.com>

(p42)

[A]パブのなかには、(21)人と煙草の煙でいっぱいでした。そのなかに彼がいました。すでにコートも帽子も脱いで、(22)人混みのなかからカウンターのほうへ歩いていました。そしてカウンターのところまで行くと、両手を台にのせてパーテンドーに何事か言いました。わたしは彼の唇の動きをじっとみつめました。

[B]お店の中はお客さんがひしめいていて、タバコの煙がたちこめていました。おじいさんはちょうど真ん中あたりにいました。帽子とコートを脱いだおじいさんはカウンターに向かって人ごみの中を歩いていきます。カウンターにつくと、両肘をついてパーテンドーに話しかけました。何かを注文したように唇が動きました。

The room we were looking into was full of people and cigarette smoke, and our little man was in the middle of it all. He was now without his hat and coat, and he was edging his way through the crowd towards the bar. When he reached it, he placed both hands on the bar itself and spoke to the barman. I saw his lips moving as he gave his order.

(評)

(疑) (21)日本語では「人」と「煙草の煙」は並列しにくい。また、「煙草」と「煙」の字が重なってうるさい。

(疑) (22)「人混みのなかから」と「歩いていました」は、コロケーションがよくない。

(p43)

[A]「とても高い飲みものだわね」とわたしは言いました。

「馬鹿よ!」とママは言いました。「たったひと息で飲めちゃうようなものに一ポンドも払うなんて!」

「(カ)彼には一ポンド以上の値打ちのものよ。だって二十ポンドもする絹の傘をわたしたちにくれたんだから」とわたしは言いました。

[B]「とっても高価な一杯だね。」

「あの人はどうかしているのよ。一口で飲み終わってしまうようなものに一ポンドも払うなんて。」

「おじいさんにとっては一ポンド以上の価値があるってことだよ。二十ポンドの絹の傘と引き換えにするぐらいだもん。」

‘That’s a jolly expensive drink,’ I said.

‘It’s ridiculous!’ my mummy said. ‘Fancy paying a pound for something to swallow in one go!’

‘It cost him more than a pound.’ I said. ‘It cost him a twenty-pound silk umbrella.’

(評)

(悪)(カ)発言者(女の子)の論理の流れが一読では読めなかった。「値打ち」(値段を付ければいくら、の感じ)の語が悪いのではないか。この cost は、元手がいくら掛かっている、のニュアンス。「価値」とすればわかるだろう。

(p44)

[A]「(23)見た、おまえ?」とママは金切り声をあげました。「(24)彼のしたことをおまえ、ちゃんと見たかい!」

[B]「ちょっと、今の見た?」お母さんが甲高い声で言いました。「あの人が何をしたか見た?」

‘Did you see that!’ my mother shrieked, ‘Did you see what he did!’

(評)

(疑) (23)母子は、ロウアー・ミドル階級と推察されるが、それにしても言葉遣いが荒くはないか。

(疑) (24) (23)と同じ

[A] 彼が出てきました。しかしわたしたちの(25)ほうへは見向きもしませんでした。

[B] おじいさんが出てきました。だけど、おじいさんは私たちの方をちらりとも見ませんでした。

Out he came. But he never looked in our direction.

(評)

(疑) (25)「ほうは」の間違いだろう。あるいは「ほうへは目を向けませんでした」か「ほうへは目もくれませんでした」としたい。

[A]...。そして彼が新しい傘でもう一ポンドを楽々と手に入れるところを見物しました。相手は痩せた背の高い若い男の人で、帽子もコートも持っていませんでした。(キ)商談が成立するや、我らが小さな老人はそこを離れて、人混みのなかに消えていきました。でも、今度はさっきと反対方向でした。

[B]...。おじいさんは新しく手に入れた傘と一ポンドを難なく交換してしまいました。今回はコートも帽子も身につけていない、背の高いやせた男のひとが相手でした。取引はつつがなく終了し、おじいさんははずむような足どりで歩きだし、人ごみの中へ消えていきました。しかし、今度はいま来た道と反対に進んでいきました。

...and we watched him as he proceeded, with no trouble at all, to exchange his new umbrella for another pound note. This time it was with a tall thin fellow who didn’t even have a coat or hat. And as soon as the transaction was completed, our little man trotted off down the street and was lost in the crowd. But this time he went in the opposite direction.

(評)

(悪)(キ) 12歳の女の子の書く文章ですか。「我が」は our の直訳だが、「あの」「例の」といった意味。例：our Napoleon(かのナポレオン) our man(例の奴)

[A]「なんて賢いんでしょう！」とママは言いました。同じパブへは二度と行かないようにしてるんだわ！」「一晩じゅうでもやっつけられそうね」とわたしは言いました。

「そうね」とママは言いました。「いくらだってできるわね。()でも、賭けてもいいわ。あの人、雨が降ることを、それこそ(ク)気も狂わんばかりに毎日毎日祈ってるんでしょうね」

[B]「本当にずる賢い男」お母さんが言いました。「二度と同じ飲み屋には行かないのよ。」「一晩中できそうだね。」「そうでしょうね。でも、一つだけ確かなことがあるわよ。あの方は気も狂わんばかりに毎日雨が降るのを

祈っているんでしょうね。」

‘You see how clever he is!’ my mother said. ‘He never goes to the same pub twice!’

‘He could go on doing this all night,’ I said.

‘Yes,’ my mother said. ‘Of course. But I’ll bet he prays like mad for rainy days.’

(評)

(誤)()I’ll bet はイディオム。I’m sure と同じで、「...だと確信する」「きっと...」。

(悪)(ク)like mad は、表の意味「気違いのように」、裏の意味「猛烈に」だが、ここは裏の意味が適当。

田口俊樹は、これから翻訳界を背負って立つ世代の人物。もう少し、気合を入れて翻訳にいそしんでもらいたいものだ。ちなみに参考の[B]訳は、大学を出て2年目(当時)の翻訳志望者 Y さんによるもの(手は一切加えていない)。こうした若い優秀な翻訳者予備軍がでてくることは、頼もしい限り。編集者諸氏も、新人を育てる情熱と意欲を持ってほしいと願う。

*** 今春開講 柴田耕太郎 主宰 「翻訳ジム」 受講生募集のお知らせ ***

今春開講、1年間徹底して英文を読み解く全日制「翻訳ジム」のお知らせです。

翻訳は教えられるか、というのがかねてからの自問でした。今は教えられないという結論に達しています。なのになぜ翻訳教室を開くのか。

私が開発したいわば「英文訓読」の手法で、受講生に一点の曇りなく読み解く技術を与えたいから。正しく読めさえすれば、あとは本人の文体の問題。ひとがとやかく言うものではありません。また、翻訳を商品として見た場合、現

場を踏んだ人間でなければわからぬ決まりごとがあります。その原則を受講生に伝えたいから。翻訳の瑣末な技術など知らずとも、きちっと読めてルールを知れば、翻訳は自ずからできると確信します。

人生のなかの1年間、毎朝、じっくり英文に取り組んでみませんか。あなたの中の何かが変わるでしょう。

株式会社アイディ

柴田耕太郎 主宰 『英文教室』

事務担当 前川

TEL : 03-3357-1189

FAX : 03-3357-4489

Email : educa@id-corp.co.jp

〒162-0054 新宿区河田町7-6 ID河田町ビル

会話にみる人称代名詞

正月気分のおふれる街並みを抜け、人もまばらな当駅始発の下り電車に乗ったときのことでした。目の前に三人の親子が座っていました。30代半ばとおぼしき眼鏡をかけた瘦型の父親と、青と黄色のおそろいのスタジャンを着た幼い兄弟。母親を家に残し、都心まで買い物にやってきた帰り道といった風でした。背丈や表情から察するに小学校へ上がる手前ほどの兄が、鉄道の終点について父親と問答していました。「なぜあちらからやってきた電車がここで引き返すのか」、「乗客が向こう側のドアから降りて、なぜ自分たちは反対側のドアから乗るのか」と、子供の目には都市のありふれた光景でさえ真新しく映っているようでした。父親は終始おだやかな表情で息子の質問に答えています。

間に挟まれた弟君は会話に加わりたものの、いまひとつ話の内容が理解できない戸惑いの表情を浮かべながら、それでも楽しい気分を抑えきれないといった風に「へえ」、「ふうん」、「そうなんだ」と相槌を打ち、はしゃいでいました。

次の駅に着くまでには兄の質問が一通り落ち着きました。やっと関心がこちらに向くものと、弟が父親の顔をのぞき込むようにして、昨日こんなことがあったよと話しました。「それでね」、「だからね」、「あのね」、「オレね」と自分が話の中心であることを無邪気によるこぶ言葉がちいさな口からこぼれだします。「それでね、お父さんがうちのお母さんと話してたときにね」と弟君が言いかけたとき、それまでじっと黙っていた兄が急におおきな声で割って入りました。「お母さんのこと、うちのお母さんって言うなよな。お父さんがよそのお母さんともいっぱいしゃべってるみたいじゃないか」「そうか。ごめん。だから、そうじゃなくてね、あのね、お父さんがお母さんとしゃべってたときにね...」

この会話を耳にして、一瞬どきりとしました。修辞や文法など習ったことのない、もしかしたら平仮名さえ満足に書けないかもしれないちいさな子供が、「うちのお母さん」という言葉の奇異さを感じ取り、不愉快だと感じているのです。ちいさな弟君の発した言葉だから、兄の感じたような意味まで深読みする人などまわりにはいなかったはずですが。しかし違う場面で、

違う人物が、違った口調で発した言葉だとしたら、文章の意味としてはやはり兄の感じたような含みを与える魔力が「うちの」の3文字には潜んでいます。発言だけで考えれば、むしろそちらの意味合いで解釈されるほうが自然かもしれません。そんなものだろうかといまいちピンとこない翻訳者がおられたら、すぐにペンを置いていただきたい、いやペンを折っていただいたほうがよいかもしれません。いくら外国語に精通し、難解な書物を読解することができたとしても、母国語の語感を失った人間や、本来から持ち合わせていない人間が翻訳という仕事をするのは、単に個人の経済的利益が見込めないばかりでなく、社会悪にも匹敵します。

残念ながら世の中にはこの類の社会悪が蔓延しています。書店で翻訳書を手にとれば「私の右腕」、「あなたたちの休日」、「彼の不幸」など、取り除いても差し支えない、不要な人称代名詞が飛び交っています。10年後、15年後、あのお兄ちゃんがこういった本を手にしたら、訳者に対して弟を叱ったときのような怒りを感じることでしょう。すこしばかり先に生まれた者として、この点にはいささか申し訳ない心持ちがします。あるいは世の活字がますます毒され、この幼き国語学者が怒りさえ感じられない若者に成長していたら、それはもう申し訳ないどころの騒ぎではありません。立派な犯罪と言えます。日本語を不自然に歪めた罪で翻訳者たちが糾弾されようとも文句の言いようがありません。

言葉に興味を持ち、日本語に愛情を注ぐことのできる人間は、誰から教わるでもなくおのずと体内に「言葉の感覚」を持っていると聞いたことがあります。電車で出会ったあの少年が内側から湧き上がる感覚に突き動かされて弟を制したように、翻訳者は祖国の言語の守り手としての使命感を持った、誇り高い仕事をしていく必要があると思うのです。